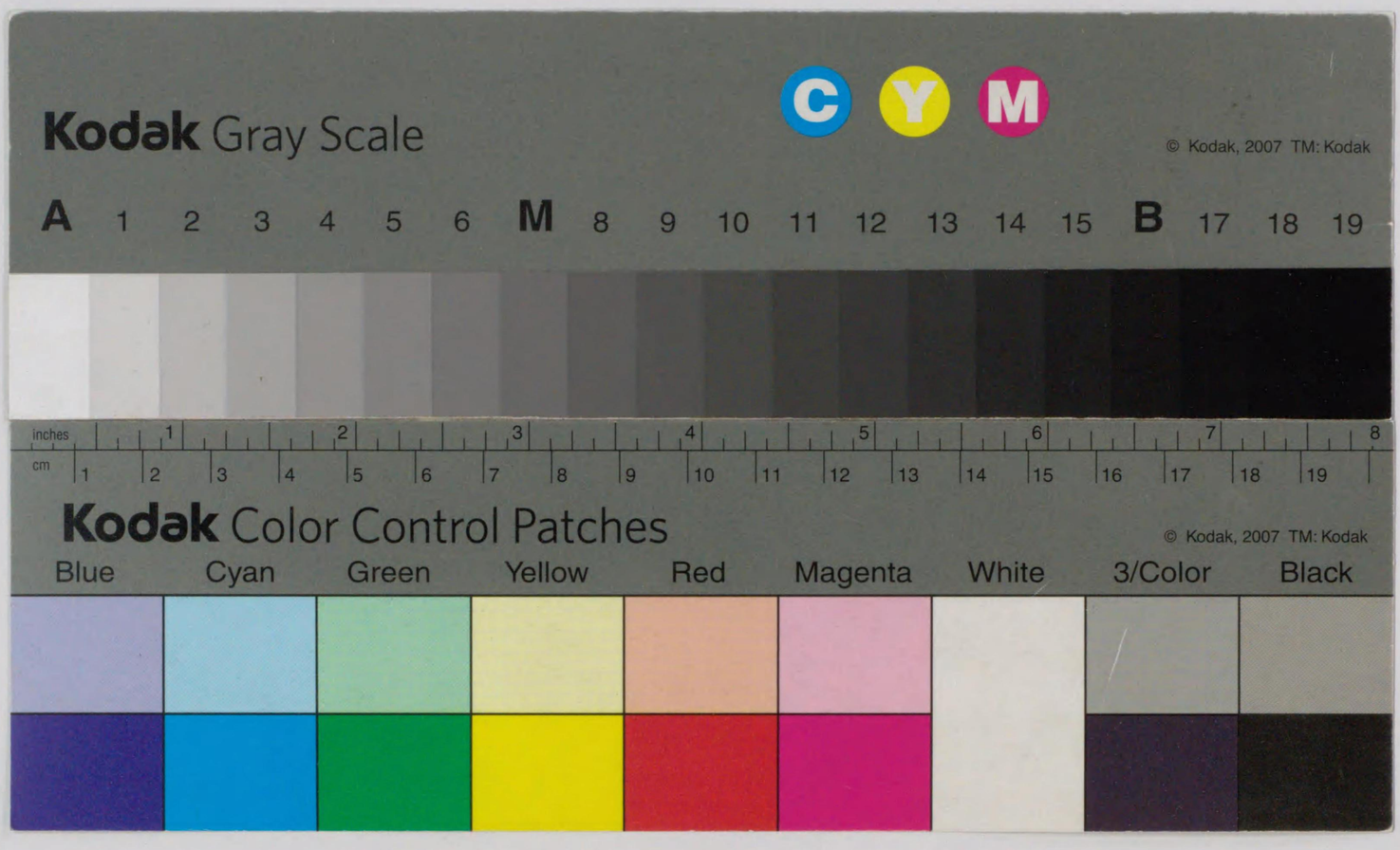

579-87
12005015211 44

陋巷風物詩

579-87

冬花帖

百田宗治著

東京 厚生閣書店

大正十五年（昭和元年）より最近に至る約二年間に成れるものゝうちより、詩三十六篇を抄綴して「冬花帖」と題し、別に陋巷風物詩の傍題を付す。

餓死 ……一五

餓死 ……一七

青空と宿命 ……二〇

元旦 ……二三

蝶……二七
蝶……二九
菊……三〇
福壽草……三一
碓氷峠……三一
輕井澤にて……三三
躑躅……三四
歸り花……三五
夕餉……三七
家族……三八
立木……三九
夕雲……四〇
歸り花……四一
歸り花……四一

夕暮の部屋……四三
夕暮の門……四四
受胎……四六
獨樂……四八
寂しき夕の歌……五三
寂しき夕の歌……五五
生れくるものゝために……五九
垣根……六〇
影……六一
影……六四
加護……六六
湯婆……六七
蟬……六八

一本の竹……六九
金魚……七一
金魚……七四
火桶……七六
夕風……七九
輪舞……八〇
日中……八二
前を見て歩いて行つた人……八三
一本の竹……八四
雲……八六

冬花帖

返照入閭巷　憂來誰共語
古道少人行　秋風動禾黍

耿　湋

餓死

餓死

ゆめに見た梅の花は
十字架のやうに曉がたの野に立つてゐた。
枝々は天を凌ぎ、
紙よりも白い花の塊りが

私達はようこそこんな夢を見る。
いや現実に於てそれを感じなければならない。遠い意識の彼方にそれを明めし様な幻想に縋れ。
それは今日も現実の海をかすめて現れる。私達人々はその意識を辿ることのみ。
人生に深い憂愁を感じながらその実その空虚なを人々は知りすぎている
曉方の人生の形なき誘惑を意味するバラ色であり
人生はその荒野にバラ色につるん番となつていく

飛び交ふ鶴のやうに空を掩つた。

ゆめに見た梅の花は、
ふきすさぶはげしい野分のなかで
ある何か颯爽たるものを泛べてゐた。
はりがね細工のやうな動かない小枝を、
夜明けの空にくつきりと勁く捺しつけてゐた。

ゆめに見た梅の花は、
眞裸で野のまん中に曝されてゐた。
それを見てゐるものは誰もなかつた。
――ゆめに見た梅の花は
それは餓死した一個のみすぼらしい死體だつた。

青空と宿命

一人の父親が
はじめて子供を野原へ連れて行つた。
青く晴れた空とあたらしい芝生のなかで、
子供はゴム毬のやうに輕く彈(はず)んだが、

遠い樫の木の根方に歩み寄つて行くその後姿(うしろすがた)
を見て、
父親はそつくり幼(をさな)い自分がそこを歩いて行く
やうな氣がした。
どんな人生がそこに封じられてあるのだらう
？
しかしそれさへも父親は、

私はこの淳の古流人のようなまるまるとなく おさなくしく感じた
真実に対する 理性人の感動する恐怖か、
それとも子に対する淳の父の愛情のためか
白地 そこに 夢想の青空のすがすがしさ
人間の意志のすがすがしさ
厳粛なる様に感じられる 人間すべてに対するはちきれる
あの笑りにも晴れ人間の貧ふ宿命との淳の対比
私はそれに刺りつぜんとしたすがた

自分と同じものがそこに延びて行きさうに思へた。

青い空と自由な野放しの空氣のなかで、一人の父親が重い不愉快な宿命を感じた。

元旦

または　羽子をつく老人

元日の朝のまだ明けきらぬ軒下で見馴れぬ
老人が羽子をついてゐる。
ひとりで興に乘り無我夢中で羽子を愉しん

である。

ぼろ〳〵の仙人のやうな身なりをし濡れた
海草のやうなものを身に纏つてゐる。
老人は憑かれたものゝやうに　軒下から軒下
をとびまはつてゐる。
その手は高い屋根の廂にとゞくかと思ふと

また低く地面の上に降りてくる。
羽子が白い花のやうに空でむつれあふ。
羽子板をもつ手がどうかするとわかい娘の
やうななまめかしさに見えてくる。

元日の朝のまだ明けきらぬ軒下で一人の老
人が羽子をついてゐる、

[illegible]

蝶

蝶

たつた一ぴきの蝶がとんできたので、
その道が風景らしくなつた。
あたらしく開墾かれた赤土の道路だが、
松の姿も自づになつた。

人生と一ぴきの蝶
人生は常に流轉し羽根をかさねく
無惨平凡に見はれる。
ひも百百かづ人生より百百の價値ある蝶を捉ゆる
人生の中に

菊

つくりてのない菊は
垣根のまはりに咲き、
また枯れてしまつた。

全人せき漠な風景があるこ
なんとたよりない人の姿があるこ
鈴蘭は他なにたのもんで生きるのか
為自然 私はセクスな ここは到底我慢
菓子なるそりよ
自分のためあと生きよ 自分の中にのみ 埋没と
出すなんわともいとはしくなってしまつたの。

福壽草

この空家のやうな部屋の疊に、
福壽草を一株日に當てる。

碓氷峠

曙ちかい風が吹いて、
空には
よぢれた繩のやうな星座がかゝつてゐた。

輕井澤にて

こゝの蜘蛛はまるい頭をして、
足が針金のやうにながい。
こゝの蜘蛛は閑雅で
水すましのやうに疊の上をすべる。

躑躅

眞赤なつつじに
何か思ひ出すことがある。
影のないこの花は明るすぎるが、
その日の匂ひに
何かの記憶がある。

歸り花

夕餉

かく貧しく
質素なる夕餉に、
われらが世の營みはあるならん。
夕日はいまだ黄なれども、
わが家のうちは暗くなれり。

家族

そこに無數の家族が住んでゐる。
夕方　天に光るものあり、
天に充ちたらへるものあり。

立木

さびしく芽をふいたこの立木に、
觸れるものは夕風だけだ。
心につめたいものをかくした
夕風だけだ。

夕雲

お伽噺の捨てられた王女のやうに、
この井戸傍に花さかせ！
黄金の馬車が
あの夕雲から下り立つ日を夢みながら…

歸り花

冬日のなかの歸り花のやうに、
妻よお前はみごもつたのだ。

歸り花

天が降らせた灰だ。
梢についてゐる歸り花のやうに、
その子は寂しい顔をしてゐるにちがひない。

夕暮の部屋

しづかに暮らすことに馴れた妻は、
壁のマリアのやうに夕暮の部屋に居る。
壁のマリアのやうにいまだ生れこぬ子を胸に
　抱き、
さびしくこの世のゆふぐれを居る。

夕暮の門

どこからやつてきたのか、童子がひとり
ゆふかたの門に立ちつくしてゐる。
どこからやつてきたのか、童子がひとり

ゆふかたの門に胸をいだいてゐる。
どこからやつてきたのか、童子がひとり
ゆふかたの門にもの言はずゐる。

受胎

こゝろかたくななマリアにも、
神様はその手をお置きになつたのだ。
梢(こずえ)にかへり花をつけるやうに
神様はそこにも微笑を殘してお行きなされた

のだ

(冬日の乾いた井戸傍(ばた)に
けふは小雀のすがたも見えぬ。)
天國のゆふかたの庭で
その子はひとり遊びながら
寂しくその門のひらくのを待つてゐよう。

獨樂

このわびしい
くらい物蔭に遊んでゐる子供たちには、
きつと何かの精靈が憑いてゐるのだ。
夕風は外套の袖を吹いてさびしい横町へ消え
てゆくのに、

ポストの立つてゐるよつかどの家の影で
子供らはいつまでも獨樂を愉しんでゐる。

この子供たちには、
あの裸木の遠い樹の枝にひつかゝつてゐる
平凡單調な入日も何の交渉はないのだ。
未練の

心にふれる夕風も何の用はないのだ。

遠い西空は油繪のやうに燒けてゐる。

希望(のぞみ)も夢もない夕燒けだ。

持ちあつかつてゐる人生だ。

だのに、この獨樂を爭つてゐる子供たちには

このくらい夕かげに戯(ざ)れ合つてゐる子供たち

には、

何か佛の加護のやうなものがつきまとつてゐ

るにちがひないのだ。

寂しき夕の歌

寂しき夕の歌

子よなんぢの生れくるのは貧しき家にて、
なんぢのこの世にいづる前の日まで、
父は汝をこの世の寒き風にあたらざらしめん
ための

衣(きぬ)買ふ金に心を勞するなるべし。

なんぢの産着は木綿にて、
まづしきなかより小切れなど買ひあつめ、
くらき夜のともしびのもとに
汝の母の縫ひ居しものなり。

いかなる人を父と呼び、
いかなる人を母と呼ぶかを、
なんぢはいまだ知らぬなり。
子よいみじくも神のみ膝に、
遊びくらしていまはあらん生れくる子よ。
人の世は佗しくさびしきところなれども、
おのれ自らその日の糧(かて)を得ざるべからざると

ころなれども、
ちゝはゝはむなしく二つの心をあはせて、
ひたすらに汝のこの世に來る日を待つなり。

とぼしくくらき燈火の下に、
額をあはせ
あはれけふもさびしき夕とはなりつ。

生れくるものゝために

子よ、貪欲なるなかれ。
子よ、素直なれ。
貪欲はこの世にて嫌はるゝ最大のものにて、
素直なるは汝みづからを仕合せにするなり。

垣根

この白いつめたいものは
天からくるのだ。
高い天の一方から落ちてくるのだ。
垣根のまはりに蟲のやうにむらがり、
ひえびえとそこで
ゆふぐれの空氣を喚(よ)んでゐるのだ。

影

夜ごと同じ時刻にめざめて泣くは、
何かあの世の怪しきかげの
そが眉の上を過ぐるが故にあらざるか。

空ゆく雲の影するごとく、
われらに見えわかず額に影するものゝありて、
その魂をさそふが故にあらざるか。

そが泣くは
おのれを超えしものゝきたりて、

このあかるき部屋の燈火のもとにも、
なほわが子を搖するものゝあるならん。

われら見えざる劍をいだき、
われら日に夜にみとりをすれど、
わが子を泣かしむるふしぎの影の
何なるやをいまだ知らざるなり。

影

羊のむれのゆくごとく、
その眉の上に
しづかに影するものゝあるごとし。

空ゆく雲のかげするごとく、
ふしぎに妙(たえ)に音樂のごとく、

わが子の眉をすぎゆくものあり。

されば時に
あやしくその額をかき曇らせ、
その妙なるものゝ姿を追ふごとし。
眠れるまゝにほゝえみて、
ひとり睦(むつ)めるときもあるなり。

加護

おのづからに汝をめざまし、
おのづからに汝をゆすぶり、
おのづからに汝をねむらす、
神の手もあるごとし。

湯婆

この子は綿の入つた黄いろい着物をきせられ、
湯婆(ゆたんぽ)といつしよに寢かせられてゐる。

この子は時々眼をさまし、
はげしい聲で泣きさけび、
またいつの間にか湯婆を抱いて眠つてゐる。

蟬

ミンミンよ、子供のために鳴いてくれ。
高い木のこずゑで鳴いてくれ。
この子をみまもつて鳴いてくれ。
白い雲の中で鳴いてくれ。

一本の竹

金魚

釣堀の金魚を釣つてゐる子供たちは、
夜はきつと自分たちが金魚になつてゐる夢を
見るにちがひない。

びら〳〵と尾ひれをうごかし、
よごれた水のなかに泡をふき、
浮きつしづみつする自分たちをみいだすだら
う。

ふたゝび歸れぬわが家のことを思ひ、

無情で冷酷な釣堀のおかみさんの顔をうかゞ
ひながら、
どんなに跳返らうとしても同じやうに、
すい〳〵と水を切るばかりの自分に氣づく
だらう。

金魚

この石女は綺羅をかざつてゐるが、
そのむかしきつと佛の憎しみをうけたものに
ちがひない。

その咎で水に入れられ、
なまぐさいよごれ水のなかを泳がされ、
やすむ暇もない苦しい泡をふいてゐなければ
ならぬのだ。

火桶

私の家の隣には御矢師が住んでゐて、人々寝しづまつた夜更けにひそかに箭竹(やだけ)を削り立てるらしい音がする。

日頃物静かな住居らしいが、縁側で子供などあやしてゐる聲を聞くと、御矢師はまだ若い三十前後の人ではないかと思ふ。

が　夜はおそらくひとりで起きてゐて、心しづかに箭竹の色つやなどみまもつてゐる

のだらう。

星々の低い冬の夜更けに、
庭ごしにもれてくるそのふしぎに冴えた小刀
の音に耳澄ましながら、
私はいつまでも眠れぬ火桶を抱いて過した。

夕風

子供は
何處かで別の母親が自分を待つてゐてくれる
のだと思つてゐる。

空に夕月を泛べ、
からつ風がはげしく町を吹いてゆく夕暮。

輪舞

夕方の部屋のすみで、
人形たちが輪舞(ロンド)をしてゐる。
達磨や犬や鎧武者もまじつて、

みんなで仲よく手を繋ぎ合つてゐる。
人形たちはそれ〴〵の小さい影をひきながら、
暮れなづんだ疊の廣場の上で歌をうたひつゞけてゐる。
小さい輪を描(えが)き合つてゐる。

日中

私の家の庭にはいつも干しものがされてゐる。
子供の胸當(むねあて)や枕覆ひが干されてゐる。
敷布やゆかたが垂れ下つてゐる。
重げに日の中に吊されてゐる。

前を見て歩いて行つた人

前を見て歩いて行つた人は美しい。
死の國へ自分でずん〳〵進んで行つた人は美しい。
白い曉の中へ消えて行つた人は美しい。

一本の竹

一本の竹をそだて、
一本の竹をふやし。

掌ほどの日のひかりを愛し、
掌ほどの日のひかりを尊び。

蠶のやうに一人の子を大切にし、
蠶のやうに一人の子を衣にまきぬ。

夜ごとの食膳を愉しみ、
夜ごとの星々を空にあがめ。

雲

手水鉢にはいつもあたらしい水を一ぱいにして置かう。
雲を宿して置かう。

昭和三年八月十七日印刷
昭和三年八月廿一日發行

冬花帖

（定價壹圓貳拾錢）

著作者　百田宗治
東京市麹町區下六番町四八

發行者　岡本正一
東京市京橋區本湊町七

印刷者　櫻井兵太郎
東京市京橋區本湊町七

印刷所　七星社印刷所

發行所　厚生閣書店
東京市麹町區下六番町四八
振替東京五九六〇〇番
（電話九段三二一八番）

冬花帖

畢

百田宗治著作

何もない庭（椎の木叢書第一篇）　賣切　既刊本近刊の豫定につき希望者は申込置かれたし

偶成詩集（椎の木叢書第二篇）　定價六拾錢　送料四錢

隨筆詩論集（椎の木叢書第三篇）　定價六拾錢　送料四錢

鑑賞　芭蕉句抄　定價壹圓四拾錢　送料拾八錢

鑑賞　藤村詩帖　定價壹圓八拾錢　送料拾八錢

厚生閣書店發行

三木露風著

我が歩めるる道

附年譜・著作目錄

われらの詩父三木露風氏が自ら筆を執り代表作二百五十餘篇を擧げつゝ叙べられし詩人的半生の回想！

よりよい作品が人を搏つ力はその作品の背後にかくれたよりよい人格の力である。三木露風氏の詩が人を搏つ所以もまた氏の詩にあつく信實に深い人格の渾融してわれらに迫る力に外ならない。

本書の年譜並びに著作目錄によれば、露風氏の詩的生活は明治三十年頃にはじまり、その著作も數へて五十餘冊に及ぶと云ふ。しかるにこれらの著作もそこに盛られた藝術的な喜びや悲しみや、あるひはまた苦しみや祈りやを通して、詩人としての露風氏の全面を窺ふに充分なものではあるが、しかも未だ人としての露風氏のかくれた一面を知るは難い。更に露風氏は一面に於て詩人として日本近代詩の父と仰がれ、詩岳の最高峰を極めた人であると共に多くの詩人が名聲に慣れ地位に安んじて人としての試錬を失ひ、藝術の精進を疎んじつつある間、一意信實の道遠く孤獨の林深くわけ入り、自らの血と慧智もて神の榮光を贖ひ得た信仰の人である。

本書は露風氏が「幼年時代より少年時代まで」より筆を起し、「青年時代」「修道院時代」「修道院を出て」の各章に於て、各時代の愛惜多い詩二百五十篇を經とし、その詩的環境と人間的努力を緯とし、その詩人的半生を叙べられたもので、露風氏の半生は光と影のごとき思出の詩趣に彩られて、讀む人をしてこの人にしてこの努力、この半生あるを偲ばせずには置かない。露風氏の詩を愛誦する人は素より、日本近代詩の創生期より今日に到る長き詩史的展開がいかに推移したかを知る上にも是非一讀すべき名著として勸めたい。

松下春雄氏裝幀　四六判五百餘頁　價二圓六十錢　送料八十錢

百田宗治著

鑑賞藤村詩帖

◆國民愛誦の古典たる藤村詩の鑑賞と解説

明治より大正・昭和の年代に入つて日本詩壇の隆盛益々極まるの感があるがこの間果して幾人の國民詩人を生んだか。明治三十年代のはじめ、藤村出でて「若菜集」を世に問ひ、全國青年子女の血を躍らしめたがごとき高き熱情を再び日本に與へた詩人があるか。「これだけ際立つて、これだけ凝測たる新生歓喜の經驗を味はうことは、文學史上にもさう度々あり得るものではない」と吉江喬松氏も述べられてゐる。藤村出でて後、日本詩壇はあらゆる流派を網羅してその精華を示したが、詩歌本來の使命たる純粋抒情の源流は、悉くその根幹を藤村に發してゐることは言を俟たない。藤村の詩はその點過去の日本が生んだ唯一の國民的抒情詩であり、藤村その人は吾等の若き情熱の永遠の父であると云ふのも過言ではない。本書はこの紀念すべき日本近代詩の古典を、單に狹小なる詩壇のみの秘寶とするに嫌らず、汎く全日本人の所有とし、且つは生れ出づる若き人々の情熱と思慕の聖書として傳へんとし、藤村全作中より數十餘篇の佳什を萃め、印刷、製本など充分意を用ひ、苟くも「藤村詩帖」の名に恥ぢざるを期し、絢爛の詩句、莊重の律格などの情緻なる布置結構を解き、純潔なる浪漫的氣魄と素朴なる抒情的心境とを縱横に鑑賞し、以て讀者をして淒々たる詩情に徹せしむるの秘鑰を公にしたるもの。嘗ての藤村の詩に泣きその詩に青春多感の夢を托せし人は素より、眞實の叫びたかく、期々愛誦に價するの詩を求めてやまぬ當代の若き人々の坐右に贈り、併せて明治文學研究の重要なる一文獻として江湖に奬めたい。

四六判白背金文字　　價一圓八十錢
コツトン二四〇頁　　送料十八錢

百田宗治著

鑑賞芭蕉句抄

本書をよんで見て、芭蕉と云へばすぐ秋をおもひ、淋しい諦觀と悟道の詩人だと思つたことが可成り概念的な觀方であつたと思つた。從來から多數出てゐる全集や考證本が我々に與へるあまりにも傳統的な俳句觀にも、我々は强ち無用を稱へやうとは思はないが、而も詩人としての本然的な芭蕉の作の藝術的な鑑賞と云ふ點には隨分遠廻りの距離があると思つた。

著者は現代日本詩壇に於てその俳句的發想を思はせる簡素な手法と、純潔な心境的詩風を以て一家の風を示せるの人、玆に芭蕉全作中より、時に觸れ著者の詩魂を錬ちたる名句二百餘句を撰び、再讀味到、或は故人の說に求め、或はその文に探り精微よくその句作の涅槃境に透徹せる藝術的鑑賞を披瀝せるもの、特に著者が「春」の句鑑賞に於て示せる詩人的風格は、從來の類書が云はんとして能はざりし所を餘す所なく說き盡してゐるのは

猶見たし花にあけゆく神の貌　　元祿元年

に「葛城の神には役の行者に繫がる傳說があつて、その貌かたち醜しとされてゐる。「卯辰紀行」の途次の句。いよ〳〵艶かなる山々の花の曙、霞晴れゆる氣の中に、なほ見たいその神の顏をと云ふ。夜ならではさをあらはさぬといふ葛城の神の醜い姿もおそらくは一層神寂びた尊いものに思はれたであらう。この人間的な傳說を背景としてこの句は生れ、それある故を以てこの句の重層味は愈加はる。「猶見たし」の起句の巧みさ、「花に明けゆく」の萬たさ華かさ、神の貌の大膽で效果的な表出。情緒化された山河自然の風趣迫るごとしである。」と述べてゐるなど、自ら「素人風」と謙遜する著者の素人ならざる犀利な氣魄を充分感じる。本文船來上質光澤紙、標布裝を施し、俳書本來の簡素なる容積と淸雅なる氣品とを盡せるもの、各句に製作年代を附し、卷尾に年表、幻住庵記を附してゐるのは用意周到である。（Y生）

四六判標布製　　價壹圓四拾錢
上質紙二百餘頁　　送料十八錢

山村暮鳥著

暮鳥詩集

山村暮鳥は、生前に於て薄遇であり、死後に漸く實價を知られて來た――現に知られ來つゝある詩人である。實際あの「聖三稜玻璃」や「雲」やの各詩集は、彼の死んだ今日取り出して見て、始めて眞實の價値が解る氣がする。他の多くの詩集は兎に角此等二册の詩集によつて、彼が日本詩壇に殘した特異の業蹟は殘るだらう。

暮鳥の詩の眞價に就ては僕はしばしば論じた。詩壇がこぞつて彼を非難した時、僕は一人味方となつて、常に彼のために戰ひ且つその眞價を世に反問した。そして彼が死んだ今日でも、僕のこの觀念は同じである。僕は百度も云ふ。彼の「聖三稜玻璃」における二三の詩（たとへば「だんす」「圖案」等）の眞價は、人がそれを認めない時でさへも、不朽に高く買はるべき名詩であり、文獻史上に殘るべき文字であると。もし晩年に於ける「愛」の境地に至つては、むしろ暮鳥の人格完成と、その生涯に於ける求道的生活の記錄を思はせる。……（萩原朔太郎氏序より）

內容抄

詩集に……室生犀星
暮鳥の詩集に序す……萩原朔太郎
序……福士幸次郎
自分は彼を見た……前田夕暮
序……土田杏村
第一部（三人の處女・聖三稜玻璃）より
第二部（風は草木にさゝやいた・梢の巢にて）より
第三部（雲・月夜の牡丹）より
山村暮鳥小傳……花岡謙二

菊半截五二〇頁
白絹ザラメ裝函入

價二圓三十錢
送料十八錢

579
87

9